

人びとの生活を支えた代用品

代用品とは

日中戦争が激しくなった 1938(昭和 13)年、国家総動員法が施行され、人も物も金も軍隊が優先されるようになります。金属や革、絹、ゴムなど、多くのものが、軍隊で使うために制限されるようになる中で、人々が知恵を絞って生み出したものが「代用品」です。

平和資料館では、当時の人々の生活を支えた多くの代用品を所蔵・展示しています。

・鮭の革で作られた子ども靴



牛革が民間で流通しなくなると、様々な動物の革を用いて製品化が試みられるようになりました。この靴は鮭の革を丁寧になめして加工されたもので、寄贈者が七五三の時に買ってもらったものだそうです。子どもの祝い事に、少しでも良いものを送ろうとした親の思いが垣間見えます。

この他、鯨革、鱈革、鱒革、蛙革など、様々な革で代用品が作られました。

・防衛食容器



鉄や錫が武器を作るために使われ、民間で使う分が不足するようになる中で、缶詰の缶に代わって食料を長期保管するために考案されたものです。

陶器製で、中に佃煮などを熱いうちに入れ、容器と蓋の間にパッキン(にかわやゴム)をはさんで蓋をすると、冷えたときに膨張していた中の空気が収縮して蓋が取れなくなるというものでした。開けるときは蓋の中心にあるへこみを釘などでつついて穴をあけると、空気が入って蓋が開く仕組みです。